

天王祭と須成祭のコロナ禍のなかの現状について — コロナ禍のなかの須成祭 —

大野麻子

はじめに

須成祭は、愛知県海部郡蟹江町の須成地区にある富吉建速神社・八劔社両社の祭礼で、津島天王祭りと同様、牛頭天王信仰に基づく、疫病退散を祈願する祭りである。平成24年には国の重要無形民俗文化財に指定（注1）、平成28年にはユネスコ無形文化遺産に登録されており（注2）、例年8月第1土曜日と翌日曜日に行われる宵祭・朝祭では、地区の中心部を流れる蟹江川に車楽船が浮かび賑わいをみせる。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大の影響から、令和2年度と3年度は船祭りは中止となり、その他の行事も縮小されることとなった。いままで経験したことのない、コロナ禍という非常時において、祭りの実施についてどのような動きがあったのかをみることで、祭りを支える人々の想いや、伝承への課題をみる。

1 須成祭について

須成祭が行われる富吉建速神社・八劔社は、奈良時代草創と伝えられる歴史ある神社であるが（注3）、現在は常駐する神職などはおらず、地区の氏神として地元の敬神会が管理をしている。富吉建速神社はかつて天王さんとも呼ばれ、嘉永6

年（1853）成立の『小治田之真清水』（尾張名所図会附録）にも「富吉天王」という見出しでその情景が描かれているように、江戸時代以前から祭りが行われており、400年あまりの歴史があるといわれている。その由来は定かではないが、津島のおみよし様を迎えて行われるようになったともいわれ、津島の天王祭りの影響を受けて始められたと考えられる。祭りは若衆を中心とした地域の人々によって運営されてきたが、現在は須成区会、敬神会、鼓笛保存会で組織される須成文化財保護委員会が祭りの運営主体になっており、なかでも敬神会が中心となって祭りの準備や諸手配を行っている。

須成祭は、8月に行われる宵祭・朝祭を中心とした「車楽船行事」と朝祭りの翌朝に祭りのご神体の神葎に災厄を託して流す「神葎流し」に関わる行事で構成されている。7月から10月にかけて様々な祭事・行事があり、別名「100日祭り」ともいわれ、この期間に行われる全ての行事が須成区民によって行われている。

須成祭では、祭総代、宿大将、山乗、稚児などの船に乗る役者衆や、葎刈の中心的役割を果たす葎刈役はその年ごとに選ばれる。特に祭りの中心



写真1 富吉建速神社・八劔社

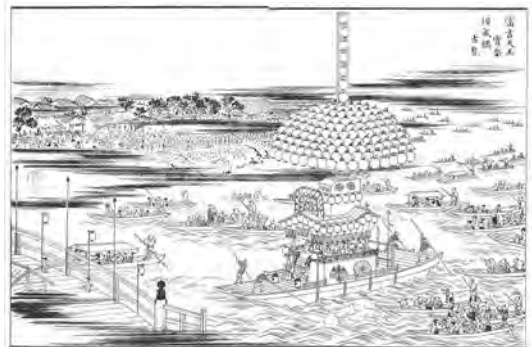


図1 『小治田之真清水』富吉天王宵祭須成橋古覧

となる稚児は7月中旬の稚児定めで定められ、これ以降祭りの準備が本格化される。そして、車楽船を飾る梅花・桜花の準備や船の組み立てをする船がらみ、祭り囃子の稽古や、菘刈、菘揃えなど、車楽船行事と神葎流しの準備が並行して進められる。

8月第1土曜日に行われる宵祭では、津島の天王祭り同様、たくさんの提灯を飾った巻藁船が登場し、祭囃子を奏でながらゆっくりと蟹江川を上り幻想的な光景を繰り広げる。祭りの中盤には船を運行させるために御葎橋が跳ね上がり、クライ

マックスを迎える。宵祭が終了すると巻藁船は山起して装いを替え、朝祭では、人形を載せて梅花・桜花で飾られた車楽船が運行され優雅な姿を見せる。須成祭で出される船の数は一艘であり、祭りの規模としてはあまり大きくはないが、その美しい祭りの情景を見るために川沿いには多くの観客がつめかけ、特にユネスコ無形文化遺産登録以降は遠方から訪れる人も増え、大変にぎわうようになった。

朝祭の翌朝には神葎流しが行われる。津島の天王祭りでは、神葎流しに関わる祭事は津島神社が



写真2 稚児行列 (令和元年天王参り)



写真5 菘刈に向かう若衆 (令和元年)



写真3 宵祭 (令和元年)



写真6 神葎流し (令和元年)



写真4 朝祭 (令和元年)



写真7 棚上り (令和元年)

行うが、須成祭では、地元の人々の手で行われる。朝祭一週間前に、葭刈という行事があり、葭刈役の若衆が白装束に身を包み、舟で蟹江川を河口まで下ってご神体になるヨシを刈ってくる。川を下る際には「ちまき」と呼ばれるマコモの縄に餅をつけたものを投げながら進み、これを受け取り食すと夏病みしないと伝えられている。葭刈で刈り取ってきたヨシは、葭揃えで束にされ、4本の神葭の束が神社の祭文殿に納められる。宵祭が始まる前に宮司が神葭の束の前に「真のご神体」を立てると祭りのご神体「御神葭様」となり、宵祭・朝祭りが執り行われるのである。そして、朝祭り翌日早朝に神葭流しがあり、神葭の束を十字に組んで真のご神体を立て、災厄を託して蟹江川に流される。御神葭様は一旦川に浮かべられてから後日棚上りで引き揚げられ、神社境内に組み立てられた棚に祀られる。以降毎日地元の方たちが疫病退散を願い参拝し、10月下旬の棚下しで棚から下るされ、境内で焼却されると、全ての祭り行事が終了となる。

2 コロナ禍のなかの須成祭

(1) 令和2年度の須成祭行事

祭りの運営方針の決定

令和2年初頭より新型コロナウイルス感染症の世界的な流行が始まり、多くの人が集まる催しは軒並み中止となり、国内のほとんどの祭り行事も中止の判断が下される状態が続くなか、須成祭についても、実施するのかどうか、どのように実施するのかが議論となった。周囲の状況をみながら、4月以降役員が関係者と相談を重ね、6月6日に行われた須成文化財保護委員会総会にて、次のように方針が決定された。(注4)

まず、密を避けるため、賑わいの行事である宵祭・朝祭での船の運行、葭刈舟の運行は中止とされ、祭りのために毎年選出される、祭総代2名と

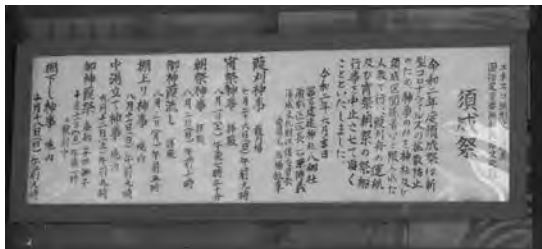


写真8 神社拝殿の掲示(令和2年)

宿大将といった祭三役、山乗や葭刈などを務める若衆、祭りの主役を務める稚児ら役者衆の参加はなしとし、選出は取りやめとした。宵祭・朝祭等の神事は行おうが、来賓は最小限とし、限られた人数で行う。葭刈は、真のご神体用のヨシ数本を地元で役員が刈り取り、真のご神体のみを祀ることとした。神葭流しの後、例年は御神葭様を祀るために180cmの高さの棚を作り祀るのであるが、棚を作らず、図1のように笹竹で結界を張り中心に真のご神体を立てることにし、御神葭様参りは例年通り行うこととなった。宵祭・朝祭の中止決定にあたっては、5月に津島天王祭り中止の報道があり、その影響もあったようであるが、神葭神事をどう行うかなどは、役員OBなど、地区の長老や宮司にも相談し、諸運印を得て決定した。これらの決定事項は、区長と須成文化財保護委員会委員長の連名の文書にて地区の回覧版で周知されるとともに、例年神社拝殿に掲示していた祭行事予定にも示された(写真8)。

令和2年度に行われた行事

例年の須成祭では、稚児定めが最初の主たる行事とされているが、令和2年度においては、稚児



写真9 令和2年の葭刈



写真10 急遽作られた神葭の束(令和2年)



写真 11 祭文殿に
安置された葎の束
(令和 2 年)



写真 12 真のご神体の作成 (令和 2 年)



写真 13 真のご神体
が安置された御神葎
様 (令和 2 年)



写真 14 例年の御神葎
様 (令和元年)



写真 15 神葎を載せ
る台 (令和 2 年)

定め等は中止となったため、葎刈が最初の行事となった。日程は例年と同じ朝祭の1週間前にあたる、7月26日(日)に行われたが、その内容は大きく変更された。例年であれば葎刈役の若衆が舟に乗り蟹江川を下って葎を刈るのであるが、密を避けるため数人の役員のみが参加し、神社の近くのヨシの生えているところへ軽トラックや自転車で行き、お祓いを行った後、役員がヨシを刈り、軽トラックに積み込んで神社へ運び入れた。当初の方針では、真のご神体用のヨシのみ用意するということであったが、立ち会った顧問役の判断で、急遽、刈り取ってきたヨシで作れるだけの大きさでいいから小さな束を作ろうということになった。可能であれば少しでも例年の姿に近づけよう、という意図であった。本来の作り方ではなかったが、すぐに直径10cmほどの小さな束が4本作られ、神社の祭文殿に安置された。

真のご神体については、8月2日(土)の宵祭神事の前、例年どおり宮司によって作成され、宵祭および朝祭の神事が行われた。真のご神体というのは、ヨシを2本括り付けた幣束である。宮司が作成すると、富吉建速神社本殿に納め、前年本殿に納めたものを取り出し、祭文殿の神葎の束の前に安置する。これが祭りのご神体「御神葎様」となるのである。真のご神体が作られないと、翌年のご神体が成り立たなくなり、神事が途切れてしまうことになる。そのため、葎刈等の行事はコロナ禍においても行われることとされた訳である。ちなみに、過去には、戦中戦後において車楽船行事が中止されても神葎神事は行われたという歴史がある。(注5)

朝祭り神事が行われた翌日の8月3日(月)の



写真 16 小舟の上の台に神葎を載せ真のご神体
を載せる (令和 2 年神葎流し)

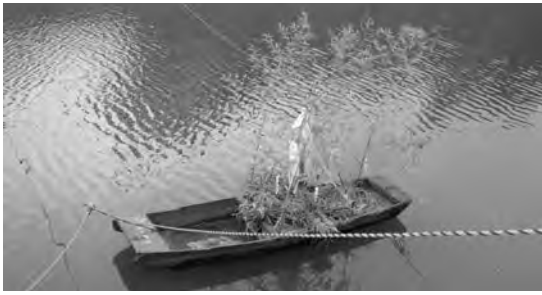


写真 17 蟹江川に浮かべられた御神葎様
(令和 2 年)



写真 18 例年の神葎流し後の御神葎様
(令和元年)



写真 19 御神葎様を台ごと引き上げる (令和 2 年棚上り) (令和 2 年)

早朝、神葎流しが行われた。例年であれば、大きな神葎の束を 2 本ずつ並べて十字に組み、そこに真のご神体を立てて川へ浮かべるのであるが、神葎の束が小さくて浮力があまりないため、神葎を載せる台が用意された。神事後、台を小舟の上に乗せ、その上に神葎の束を十字にして載せ、川を漂わせて神葎流しが行われた。

神葎流しの一週間後の 8 月 9 日 (日)、棚上りで御神葎様は川から引き揚げられた。神葎の束を載せた台がちょうどはまるように棚が用意され、



写真 20 境内の棚に御神



写真 21 令和 2 年の棚葎様を載せた台を設置する



写真 22 棚上り神事 (令和 2 年)

四方に笹竹を立てて仕上げられた。例年より小さな棚の前で神事があり、棚上りは終了したが、この日の晩から行う御神葎様参りは例年通り、疫病退散を願い行われた。期間中の秋祭りの奉納は中止となったが、須成の住民の方は交代で毎日参拝を続け、10 月 18 日 (日) の棚下しで行事は終了した。例年とは違う御神葎様や棚の様子に、年配の方からは、簡単に束ねられた神葎に対し「やはりきちんと作った方が良い」という声もあった一方で「棚が低いので間近で拝むことができた」という意見もあったという。(注 6) コロナ禍のなか、試行錯誤しながら神葎神事を行ったことで、神葎に対する地元の人のこだわりや、思いが垣間見えた部分もあった。

(2) 令和 3 年度の須成祭行事 祭りの運営方針の決定

令和 3 年度においても、新型コロナウイルス感染症拡大の収束の見通しが立たない中、祭り行事の運営に関して、次のような方針が打ち出され

た。基本的に令和2年度並みに縮小するけれど、伝承のため感染防止の対策を取りながら必要な作業を行う。車楽船行事に関しては、船は出さないが、車楽船を飾る梅花・桜花を作成するほか、祭り宿を設置して山車人形を飾る。神葎については、束の大きさは小さくても本来の手法で葎揃えを行い、通常の大きさの御神葎棚を設置する。また、葎刈舟運行に際して作る「ちまき」の作成等は、技術伝承のため、時期を変え、状況を見て行うこととされた。須成祭に携わる役員の任期が3年であることから、祭り行事が2年続けて中止となり何もできないと、分かる人がいなくなってしまうという心配があったため、顧問や参与といった役員経験のある人に技術指導の協力を得て、密を避け時間を短縮しながらも、できる範囲でさまざまな作業を実施しようということになったという(注7)。

令和3年度に行われた行事

令和3年度においては次のように実施された。車楽船行事に関わる活動については、宵祭・朝祭までに梅花作り、宿の設置、桜花作り、人形飾りなどの祭りの準備作業が、一部ではあるが、実施された。梅花は、榎の枝に和紙の花を貼って作るもので、本来は車楽船の屋根の上の両脇に各4本、宿に1本の計9本作成される。この年は作成技術の伝承のため、宿に飾る1本のみを作成することとなった。7月4日(日)に地区に自生している榎の枝を切り乾燥させ、7月17日(土)にはその枝の葉を落とし、枝を組んで花台を作り、和紙の花をつけて完成させた。花台づくりでは、作業を行わない役員たちが手順を覚えるためにその作業工程を見守る場面もあった。この頃にはワクチン接種が始まっていたこともあり、役員らはなる

べく参加するようにしていた。

7月25日(日)には宿の設置を行った。宿の設置に先立ち、敬神会長、区長、鼓笛保存会長の村方三役が三重県の多度大社に参拝して札をうけ、梅花が飾られている公民館に多度大社分霊を設置した。多度大社参拝は、船祭りの晴天を祈願して行うものである。この年は船を出さないことが決まっていたが、今後の伝承のため、実施された。多度大社分霊設置後、山車人形を飾る台を準備してから参拝し、この日の行事は終わった。役者衆が一同揃って行う宿入式は実施されなかったが、その一方で、通常は別の日程で行われる人形を飾る台の設置が行われた。令和3年度の行事では、行事縮小と稼働日減少のため、本来別の日程に設定される作業を同じ日に行うなどの措置が若干見受けられた。(表1)

7月31日(土)には葎刈の後に桜花作りを行った。本来は車楽船の屋根の上の正面と宿に飾る2本が作られるが、梅花同様宿に飾る1本作成することとし、柳の枝を切り、葉を落として花台を作り、和紙の花をつけて完成させ、宿に飾った。8



写真24 宿を設置し多度大社分霊に参拝する(令和3年)



写真23 梅花の花台作り(令和3年)



写真25 桜花作り(令和3年)

表1 例年行われる須成祭の行事と令和2年度・3年度に行われた行事

明朝体：車楽船行事 ゴシック体：神葎流し関連行事

行事	例年	令和2年度日程	令和3年度日程
榎切り（梅花用）	6月下旬～	なし	7月4日（日）
桜の花弁作り	7月	なし	7月4日（日）
榎葉落とし・梅花の花台作り	朝祭 22 日前	なし	7月 17 日（土）
稚児定め		なし	なし
真菰刈り（葎刈ちまき用）		なし	7月 24 日（土）
多度参拝・宿入り	朝祭 14 日前	なし	7月 25 日（日）
梅花の花付け等	朝祭 13 日前～	なし	7月 17 日（土）
稽古始め	朝祭 13 日前	なし	なし
葎刈準備（ちまき・鳥の子作り等）	朝祭7日前の早朝までに	なし	伝承のため、ちまきの縄作りのみ年末に実施
葎刈	朝祭 7 日前	7 月 26 日（日）	7 月 31 日（土）（朝祭8日前）
船がらみ	朝祭 7 日前	なし	なし
柳切り・葉落とし・桜花の花台作り	朝祭 6 日前	なし	7 月 31 日（土）（8日前）
葎揃え	朝祭 5 日前	なし	8 月 1 日（日）（7日前）
人形飾り	朝祭 3 日前	なし	8 月 7 日（土）（1日前）
稽古上げ		なし	なし
みそぎ	8月の第1土曜日	なし	なし
天王参り・寺参り		なし	なし
宿囃子・祭船の運行（宵祭）		8 月 1 日（土）（神事のみ）	8 月 7 日（土）（神事・囃子のみ）
山起し	8 月 第 1 土曜日深夜～翌日曜日未明	なし	なし
祭船の運航・天王囃子（朝祭）	8 月 第 1 土曜日の翌日の日曜日	8 月 2 日（土）（神事のみ）	8 月 8 日（日）（神事・囃子のみ）
山下し		なし	なし
神葎流し	朝祭 1 日後	8 月 3 日（月）	8 月 9 日（月）
棚上り準備	朝祭 6 日後	8 月 6 日（木）	8 月 14 日（土）
棚上り	朝祭 7 日後	8 月 9 日（日）	8 月 15 日（日）
御神葎様参り	朝祭 7 日後～ 76 日後	8 月 9 日（日）～ 10 月 17 日（土）	8 月 15 日（日）～ 10 月 23 日（土）
中湯立て	朝祭 41 日後	9 月 12 日（土）	9 月 25 日（土）朝（台風接近で 18 日を変更）
御神葎様神事（神楽・子供獅子）	10 月スポーツの日	なし	なし
棚下し	朝祭 77 日後	10 月 17 日（日）	10 月 24 日（日）

月1日(日)には菘揃えと同時進行で人形飾りがあり、祭り宿である公民館にイザナギ、イザナミであるとされる男女の人形が飾られ、例年同様祭りの日まで面が和紙で覆われた。これで車楽船行事の準備は一段落となり祭当日を迎えることとなった。

8月7日(土)、8日(日)の宵祭・朝祭では、当初は神事のみ行う予定であった。しかし、数日前に鼓笛保存会から人形が飾られている宿で祭囃子を奉納したい、と提案があり、祭囃子と奉納太鼓の演奏が行われる運びとなった。本来であれば宵祭終了後の山起しで車楽船の屋根の上に人形を載せると面の覆いはずすのであるが、宵祭神事が始まる頃に覆いはずし、その前で祭囃子や奉納太鼓が演奏された。朝祭では、宿での祭囃子の演奏の後、観光交流センターにて奉納太鼓が演奏された。若干の関係者と、偶然通りかかった人々が演奏を見守り拍手を送り、少し晴れやかな雰囲気が出され、依然コロナ禍にあるなかでも、令和2年度とは違った場面がみられた。

神菘流しに関わる行事についても、令和2年と違う動きがあった。7月24日(日)には真菘刈り

が行われた。マコモは、菘刈船から若衆が、夏病み除けの縁起物として投げる「ちまき」に使用するもので、ちまきは、マコモの葉を左縄に縛った縄の先に餅をつけて作られる。この日は役員総出で地区内の休耕田でマコモを刈り、洗ってから整理し、束ねて干すまでの作業を行った。しかし、手分けをして作業をしようとする、初めての人ばかりで、簡単な作業でもやり方がわからず滞る場面もあり、経験値の大切さが浮き彫りになった。7月31日(土)に菘刈が前年同様に行われたが、神菘の束を作る菘揃えについては、後日、本格的に実施された。8月1日(日)の菘揃えでは、役



写真 28 真菘刈り (令和3年)



写真 26 人形作り (令和3年)



写真 29 ちまき



写真 27 朝祭当日の祭囃子の奉納 (令和3年)



写真 30 菘刈 (令和3年)

員OBも協力し、ヨシ1本1本の袴や下葉をとって整理し、葎簀を作り、作った葎簀でヨシの束を包んで束にし、神葎を完成させた。神葎の束は、三か所縄で縛って完成させるのであるが、一番下に7回、真ん中に5回、上に3回巻くと決まっております、縄の縛り方も、俵結びという結び方をしなくてはいけないとのことで、巻き方や結び方を伝授しようと、見込みのありそうな1年目の役員に、できるまで何度もOBが指導する場面もあつ

た。また、例年よりもヨシの生育が早く、穂が出てしまっており、それをどうするか議論になった場面もあった。これについてもOBに相談したり古老に聞いてみたりしていたが、誰も経験のないことだったので、そのままにすることになった。そうして、太さは例年の30cmより細い20cmほどになったものの、本来の手法で作られた4本の神葎が完成し祭文殿に安置された。

宵祭・朝祭神事等が終わり、8月9日(月)には神葎流しが行われた。神葎の束が細いということもあり、令和2年同様、小舟の上に台を置き、



写真31 ヨシの袴や下葉をとる
(令和3年葎揃え)



写真34 祭文殿に運ばれた神葎の束(令和3年)



写真32 葎簀を作る(令和3年葎揃え)



写真35 小舟の上の台に神葎を載せ真のご神体を立てる(令和3年神葎流し)



写真33 ヨシを葎簀で包み神葎の束を作る
(令和3年葎揃え)



写真36 川に浮かんだ神葎(令和3年神葎流し)



写真 37 棚の準備 (令和3年)



写真 38 棚上り



写真 39 御神葎様の棚 (令和3年)



写真 40 棚下し (令和3年)

その上に神葎を載せて行われた。8月15日(日)の棚上りに先立って、8月14日(土)には棚の準が行われた。御神葎様を祀る棚に関しては、例年と同じ大きさの棚を立てることにされたのであるが、これまで使っていた棚の骨組みが組み立てにくく、作業に手間取るという課題があったため、組み立てやすい新しい資材を試験的に使うことになった。異例の内容で行事を行うこととなったこの年だからこそ、いつもと違うことを試す機会にもなったのである。地域住民から異論がなければ、次の年から本格導入するだろう、ということである(注8)。そのため、この日は地元の建築業者から資材を借りて棚の骨組みが組み立てられた。骨組みは笹竹で囲まれ、正面には大根締め(おおい)の注連縄(ぬわすな)が飾られ、作業が終えられた。翌日の棚上りでは、令和2年とは違い、台ごとではなく、例年のように1本ずつ神葎(かみかき)を運び、棚に上げられた。この日の夜から御神葎様参りが行われたが、試験的に使用された棚の骨組みに異論はほとんどなかったという。そして、10月24日に棚下しの行事があり、令和3年度の須成祭(すなり)行事は終わったが、年末には、注連縄(ぬわすな)作りに合わせ、伝承のための、ちまきの縄づくり作業が行われた。令和3年度は伝承のため様々な活動が行われた。たった1年のブランクではあるが、マニュアルがあっても、実際にやってみないと分からないことが多くあることを実感させられ、継続して行事を行うことがいかに大切かを思い知らされた年になった。

3 令和2年度・3年度の祭り行事を経てみえたもの

コロナ禍という、今までに経験したことのない異例の事態のなか、令和2年、3年のまつり行事を経てみえたものは何か。

須成祭(すなり)の動きをみえてみると、その年の祭りをどう行うかという方針については、地域の長老・古老の意見を聞きながら話し合いを重ね、決定がされた。祭運営するうえでも、役員OBの協力を得ながら進められた。このような姿勢があることが、400年あまりの間、さまざまな時代の変化がある中でも須成祭(すなり)の伝統が守られてきた秘訣の一つになっているのではないかと感じた。

また、宵祭(よるまつり)・朝祭(あさまつり)の行事が中止になった一方、

可能な範囲で試行錯誤しながら神葺神事が行われたことで、神葺に対する地元の人のこだわりや、思いがクローズアップされたように思う。

そして、コロナ禍という非常事態による祭り行事の中止や縮小を機に、コロナ対策だけでなく、その他の課題についても考えるきっかけとなっている。須成祭では役員による手作業で準備を進める場面が多く、その技術伝承だけでなく、人員確保も課題になっている。近年、高齢者でも仕事を持つ人が増え、平日動ける人が少なくなっていることから、準備のスケジュールを見直す案も出ていたとのことである。環境の変化も深刻である。地球温暖化の影響か、猛暑も年々過酷になってきているだけでなく、マコモがジャンボタニシの食害に遭ったり、ヨシが育ちすぎて穂が出てしまったりするなど、祭りで使う植物の生育具合にも変化が出てきていることも問題視されている。さらに、コロナ禍により、人々の衛生意識が高まり、棚上りで川に浸かっていた御神葺様を触るのに抵抗がある人も出てきているという。このような状況のなか、祭りを続けていくために、伝統を守りつつ現代の人が実施しやすいよう改善できる部分はないか、さまざまな検討がされ始めている（注9）。

コロナ禍のなかでの須成祭と津島天王祭りの対応と比べてみると、同系統の祭りでありながら、祭りの実施についての判断の経緯や、それぞれの担い手の動きに違いがみられた。それは、津島天王祭りは様々な組織によって支えられているマチの祭であり、須成祭は地区の人々が中心となって行うムラの祭りの性格を持っていることのあらわれであろう。さらに、祭りの運営資金についても、津島では、祭りが中止になることにより寄付金や協力金が得られなくなる、という運営資金への心配の声があったというが、須成ではそのような話は全然聞かれなかった。須成祭の祭りの運営資金は地区で集めたお金や公的補助金が主で寄付金や協力金が占める割合は少ないためである。これも、マチの祭りとうらの祭りの違いなのかと思わされた。

一方で、コロナ禍のなかで伝承への課題が浮き彫りとなり、携わる人々が次につなげるための努力や工夫をしようという姿は双方に共通するものであった。これは、この二つの祭りだけでなく、

他の祭りにもあてはまることになるかもしれないが、このコロナ禍を機に、後世に祭りを継承していくために、改善や新たな取り組みを取り入れ、変化させていく部分があるのではないだろうか。私たちは、今後も、その推移を見守っていかねなければならない。

注

- 1) 平成24年(2012)3月8日「須成祭の車楽船行事と神葺流し」の名称で国指定重要無形民俗文化財となった。7月初旬から10月下旬まで行われるさまざまな行事全てが指定されている。
- 2) 平成28年(2016)11月30日(日本時間12月1日)、国指定の33の祭りで構成される「山・鉦・屋台行事」の一つとしてユネスコ無形文化遺産登録(代表一覧表記載)が決定された。名称等は国指定と同じである。
- 3) 神社縁起によると、天平5年(733)草創。富吉建速神社の祭神は素戔鳴尊、八剱社は天照大神、素戔鳴尊、日本武尊、宮貴媛命、建稲種尊の熱田五神。
- 4) 須成文化財保護委員会委員長の馬場恒幸氏の御教示による。
- 5) 富吉建速神社・八剱社所蔵の「大正十五年起神祭役割名簿」による。
- 6) 前掲注4
- 7) 前掲注4
- 8) 前掲注4 なお、試験的に使用された棚は本採用となり、地元の建築業者より寄付されたという。
- 9) 前掲注4

参考文献

蟹江町教育委員会編『須成祭総合調査報告書』蟹江町教育委員会、2009